

平城天皇 楊梅陵鳥居改築工事に伴う立会調査

平城天皇楊梅陵は、近鉄大和西大寺駅から東へおよそ1.5km、平城宮跡の北、奈良県奈良市佐紀町に所在しており、その立地は、奈良盆地の北を画する平城山丘陵の南斜面にあたる。墳塋は、直径約85～95mの、やや不整形な円丘である（第49図）。

当陵から南側にかけての区域には、かつて、全長約330m、墳長約250m、後円部径約130m、前方部幅約160mで、盾形の周濠を持つ前方後円墳である市庭古墳が存在していたことが明らかになっている⁽¹⁾。巨大な古墳であったが、8世紀初頭の平城宮造成時に、前方部の削平や周濠の埋め立てなどが行われて大きく改変されており、平城宮整備区域に遺構表示がされてはいても、かつての姿を想像することは困難である。当陵の墳塋は市庭古墳の後円部に位置しており、その墳丘にあたるものと考えられているが、現状では段築や葺石は確認できず、また、この規模の前方後円墳の後円部とするとかなり低く平面形もゆがんでいるなど、後円部の墳丘がそのまま残されているという風でなない。前方部ほどではないにせよ、大きな改変を受けているものと推察される。

第51代平城天皇は、大同4年（809）に嵯峨天皇に譲位したのち平安京から平城京に移り住み、翌弘仁元年（810）に「薬子の変（平城太上天皇の変）」として知られる嵯峨天皇との対立に敗れて薙髪し、天長元年（824）に崩御した。同年「楊梅陵」に葬られたが、その所在は失われ、元禄の探索・修陵では、現在の仁徳天皇皇后磐之姫命平城坂上陵にあてられている⁽²⁾。その後、北浦定政が現在地に比定し⁽³⁾、「幕末の修陵」に際して現在地に決定された⁽⁴⁾。

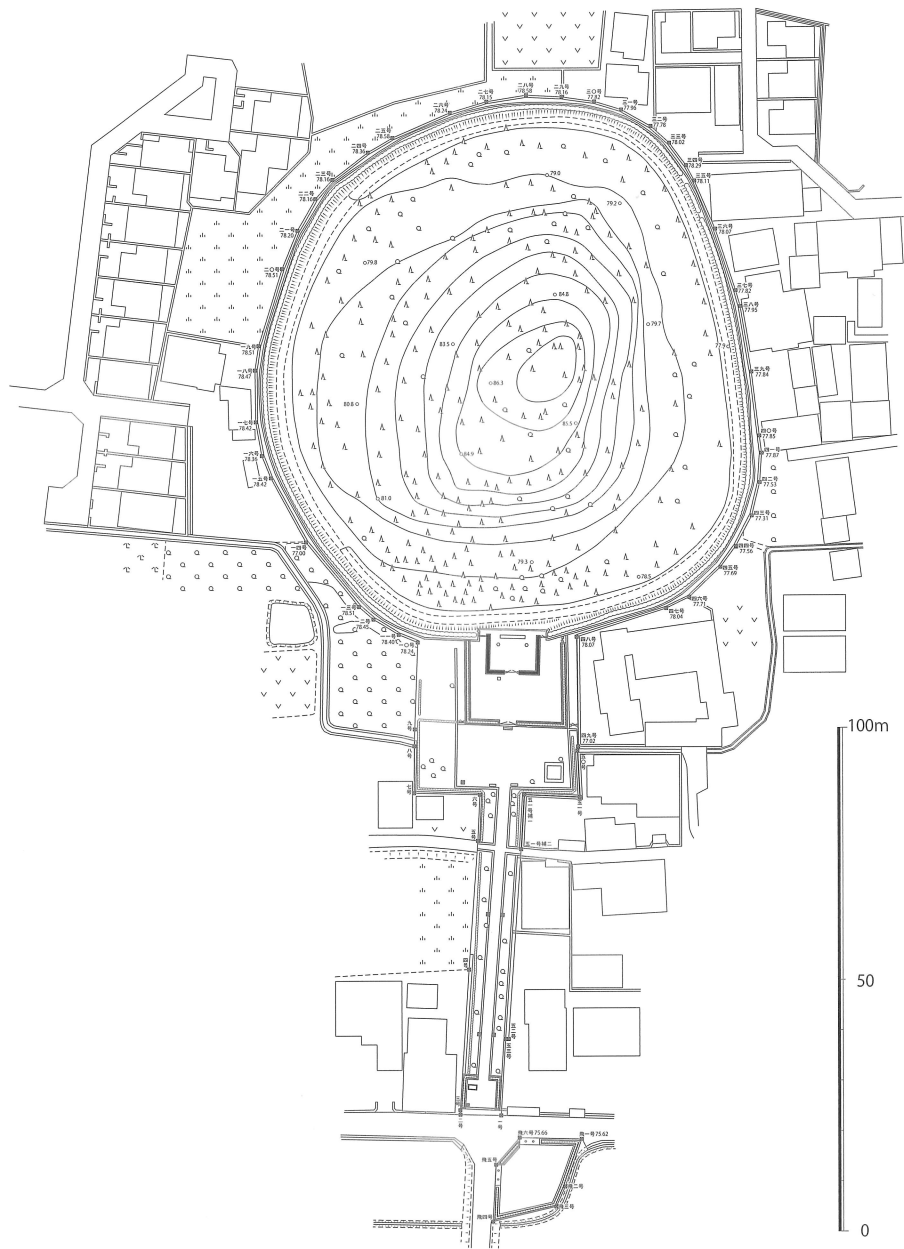
当陵における調査事例としては、昭和59年に実施した鳥居建替工事に伴う立会調査⁽⁵⁾がある。今回の工事は、その際に建て替えた木造鳥居が老朽化したことによるもので、これを機に、鳥居は木造から石造へと変更されることになった。現在建替時期を迎えつつある木造鳥居には、多くの場合、コンクリート製の基礎が設置してあるが、当陵もその例に漏れないものであった。木造鳥居用の基礎は石造鳥居の基礎としては使用することができないため、新規の基礎を設置する前に在来コンクリート基礎を撤去する必要があり、掘削の規模は在来基礎よりも一回り大きく、長さ・幅ともおよそ2m、深さおよそ1.5mのものが2箇所となった（第50図）。当工事の工期は平成30年12月8日～31年3月29日で、1月21日に陵墓調査室員と現地の監区職員立ち会いの下で掘削が開始され、在来基礎の撤去が終わって完掘したのち、25日まで記録化作業を行った。また、新規基礎設置後の埋め戻しが行われた2月7・8日には、現地の監区職員が立ち会い、掘削土中に含まれていた遺物の回収に努めた。なお、陵墓調査室員立会期間中の1月25日には、歴史学・考古学関係16学・協会の代表者に現地を公開した。

今回の掘削箇所での土層は、その性格から大きく4層に大別できる（第51図、図版49）。Ⅰ層は、拝所内に敷き詰められた白砂の層である。Ⅱ層は、延石や先々代以前の鳥居など、拝所整備以降に設置された工作物の設置・撤去に関わる土層である。Ⅲ層は瓦を包含している造成土で、Ⅳ層は地山層である。Ⅳ層上面の標高は一般拝所の高さとはほぼ一致するので、Ⅲ層が盛られたのは「幕末の修陵」時であると思われる。Ⅲ層とⅣ層の間には、市庭古墳に伴うと見られる土層は介在していなかった。掘削箇所の平面的位置が市庭古墳の墳丘内であることは確実であることから、市庭古墳の前方部側の削平は、当陵前付近においても徹底的に行われたものと判断される。

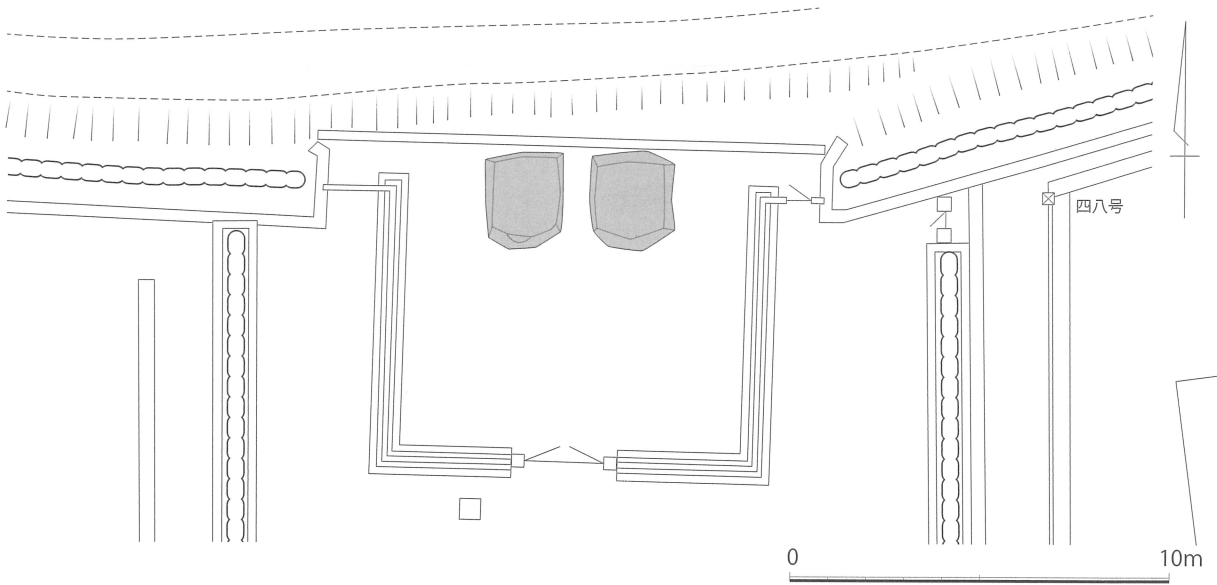
今回の調査では、土師器片（第52図1）、須恵器片（2・3）、瓦片（4～7）、瓦質摺鉢片（8）など、遺物49点が出土した。最も多いのは瓦片であるが、瓦片はⅢ層中に散漫に分布しており、近くに遺構が存在していることを予想させるような状況ではなかった。また、市庭古墳に関わると評価できるような遺物は認められなかった。

以上、今回の掘削箇所においては、保存すべき遺構は確認されず、工事は予定どおり施工された。

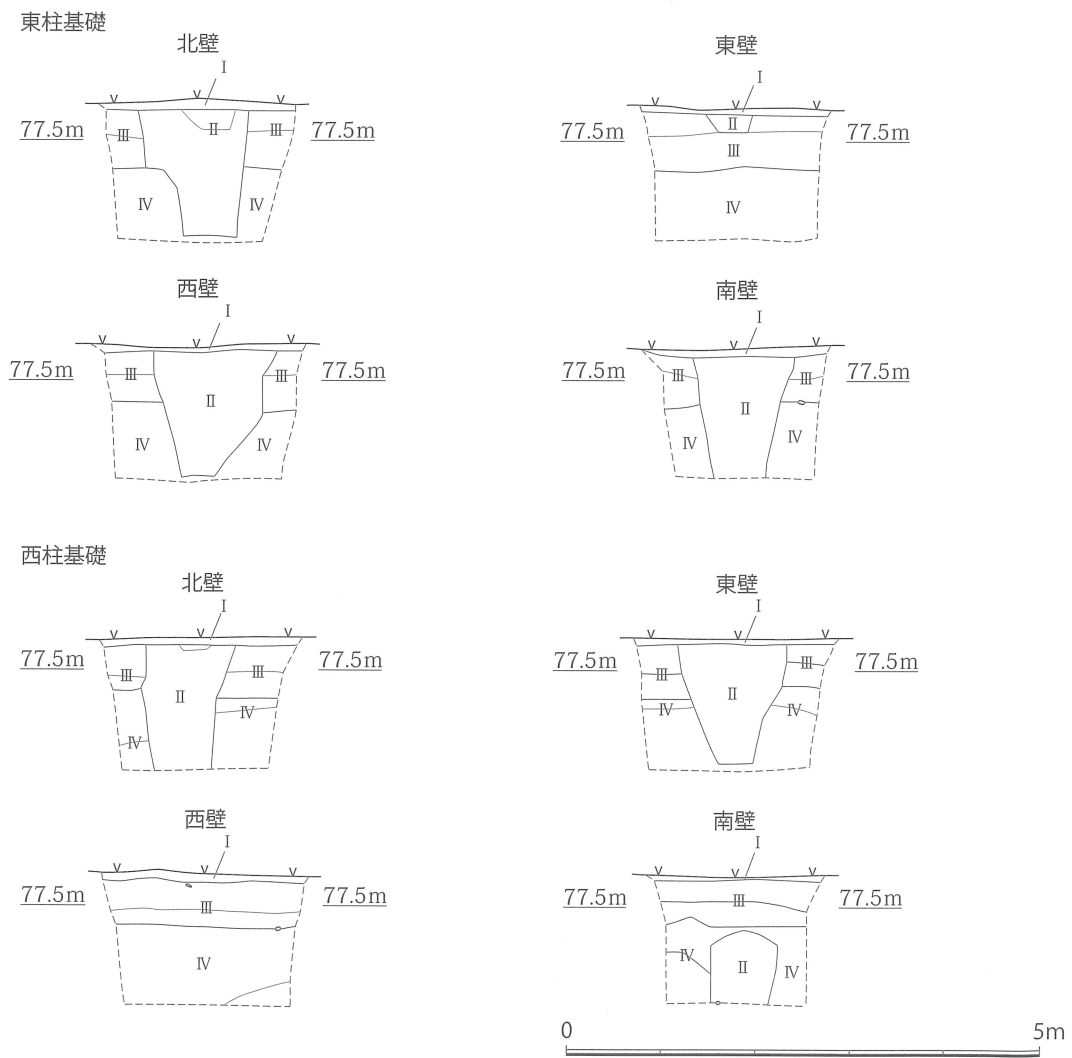
（有馬 伸）



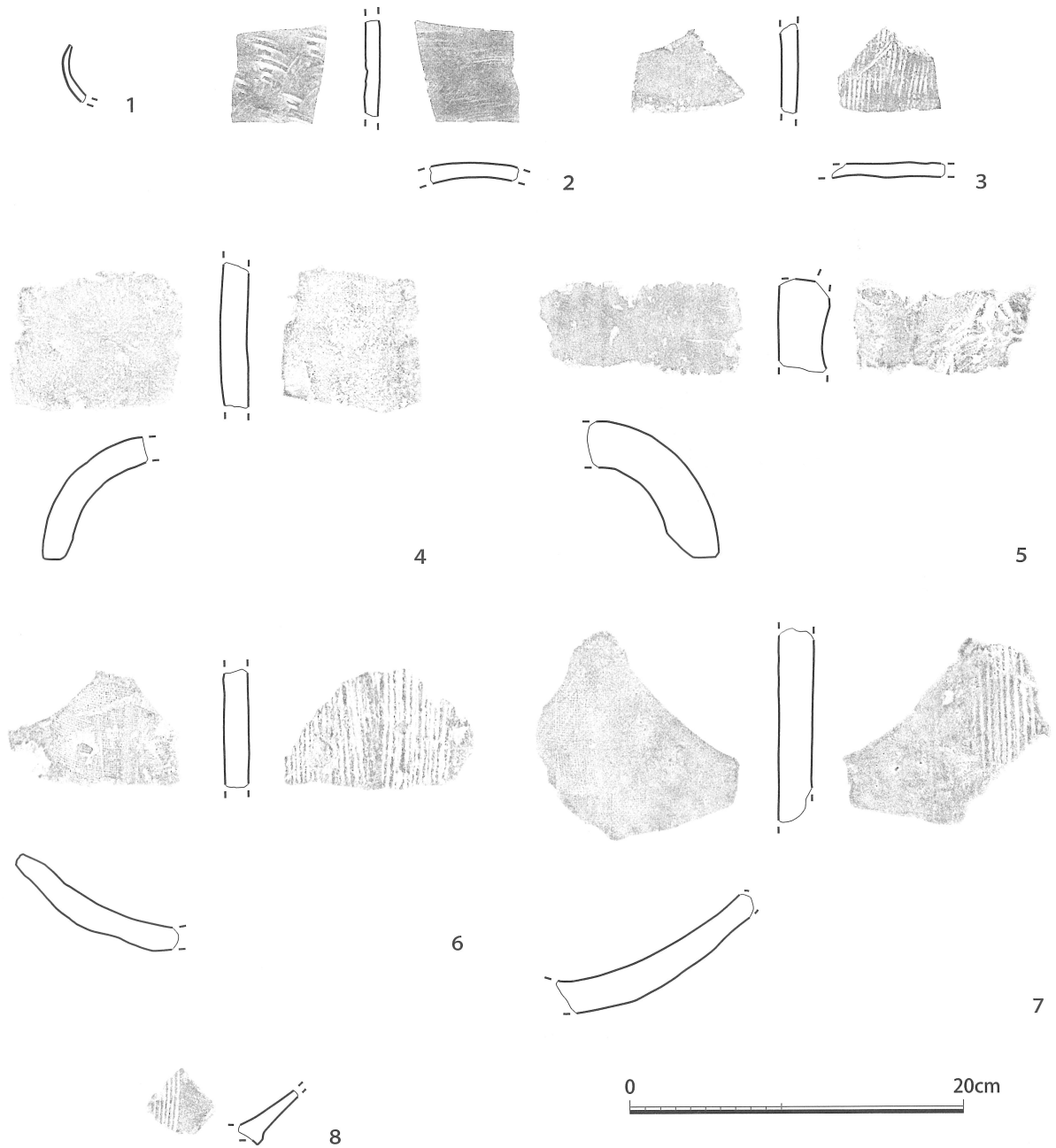
第49図 楊梅陵 測量図(1/1500)



第50図 楊梅陵 掘削箇所位置図(1/200)



第51図 楊梅陵 掘削箇所断面図(1/80)



第52図 楊梅陵 出土品実測図(1/4)

註

- (1) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』（『奈良国立文化財研究所学報』第26冊）、1976年。
- (2) 玉井定時「元禄十丁丑年山陵記録」（秋山日出雄・廣吉壽彦編『元禄年間 山陵記録』、財団法人由良大和古代文化研究協会、1994年）。
- (3) 北浦定政「打墨繩」（図書寮文庫所蔵、函架番号：351・2）。
- (4) 谷森善臣「山陵考」（外池 昇編『文久山陵図』、新人物往来社、2005年）。
- (5) 石田茂輔「昭和五十九年度 陵墓関係調査概要 調査の全容」（『書陵部紀要』第37号、宮内庁書陵部、1986年）。



1 東柱基礎 北壁（南から）



2 東柱基礎 東壁（西から）



3 東柱基礎 西壁（東から）



4 東柱基礎 南壁（北から）



5 西柱基礎 北壁（南から）



6 西柱基礎 東壁（西から）



7 西柱基礎 西壁（東から）



8 西柱基礎 南壁（北から）